

第九回吟神リサイタル終る



三月十九日(日)曇り空の中、九段会館は早朝より遠方からバスを連ねての参加、会場満員のうち盛大に行なわれました。

第一部から第六部まで盛り沢山のプログラム構成で、我が南洲吟道会からも第二部祝吟祝舞オンパレードで、日本吟道学院高峰、南洲吟道会の看板娘、吉永旭祥さんが「まなこ閉れば」は際立って素晴らしく、舞を舞った静山流の星、有坂静鏡さんと共に会場の観客を魅了し、流石、コロムビア専属、片や舞踊家と言う感じが聞く者の五感を振るわせた。

又、同じ二部で「赤提灯」の表題で、嗚呼硫黄島には日本吟道学院の錚々たるメンバーで、林緑神・浪口宗神・我が南洲吟道会会長吉永龍洲・渡辺心龍・石橋将龍・舞は不動智心流詩舞道家浅羽離鳳・不動智心流剣舞道家谷津鐵洲(南洲吟道会十五周年、二十周年記念大会でお馴染みの)各先生方の吟の迫力と剣舞は素晴らしく、將に詩吟と舞は男を象徴する調和とりズムを感じた。

第三部、華の吟詠歌謡ショーは、オーブニング吟詠太鼓で始まり、合吟「武田武士」は我が会からも男性陣四十名、片や緑神先生の門下生四十一名計八十一名、舞は南洲吟道会の板東三緒二郎(武田道洲)と山内泉洲の各名手で意気の合った素晴らしい舞でした。舞に見取れたか我が南洲吟道会の出演メンバーは、緑神会の勢いに圧倒されたのか、練習不足なのか、いまいち迫力に欠けた感がありました。これは発表が終った後に応援に見えられた方々からも異口同音の声がかれました。この声を今後の課題として、吟詠に研鑽を重ねて努力したいものです。その他数々の催しがあり、夕刻五時半過ぎ幾多の想いを残し閉幕となりました。

最後にこのリサイタルに出演するために、ご指導下さいました吉永先生、ありがとうございました。当日役員として協力なされた方、応援に駆け付けて下さった方々に「ご苦労様でした」と申し上げます。又、このリサイタルの実行委員長で南洲吟道会の顧問としていつもご尽力下さっています森豪神先生に大会大成功の「万歳三唱」をお送りしましょう。

合同演芸大会に参加して



若草教場 有坂煌祥

鷺の宮には、若宮・鷺六・白鷺・若宮憩いの家の四つの老人対象の会館があり、鷺の宮地域センターの管轄下にあります。

今回始めて、四つの会館を利用するサークル団体が集まり、合同演芸大会が三月十五日、鷺の宮地域センター三階洋室において開催され、若草教場も少ない人数ながら参加しました。民謡・カラオケ・フラダンス・日舞等様々なサークルが参加し、詩吟はわが教場ただ一つでした。持ち時間十分以内で一段の方々誰にでも楽しんでいただけようにと、入会一年の長谷川永吟さんの歌謡吟詠(オオケストラカラオケ)による「武田武士」は会場の皆様も一緒に歌って楽しんでくださいました。一方、青木泰洲さんの吟と私の舞で「寒梅」を三月の時期に相俟った歌詞に、会場内もシーンと静まりかえって聞きいつて下さいました。この二つの静と動の変化のある詩吟には皆様から好評を得ることができました。又、中村立水さんは、カラオケの部より二演し普段の詩吟の練習の成果でしようか、マイクの使、方が良く味のあるカラオケができました。

会場には熟年教場の高橋愛祥さんをはじめ多数の方々や緊張するやらの大変な一日でした。

いろいろなお機会にどんどん参加し、いろいろな人に詩吟の良さを感じてもらえるよう、皆様の指導を仰ぎながら若草教場一同努力していきたいと思っております。

☆「速報」初出場で栄冠を!

五月五日、水戸で開かれた第十九回茨城放送杯吟詠コンクール十八立の部に当会の菊田正城さんが日本吟道学院チームの一員として出陣し、見事優勝を果たし涙の金メダルを取得されました。来年は構成吟に出演が決まり、今後の活躍が期待されます。

教場めぐり

若鷺教場長 高橋詠龍

創設 昭和五七年五月
指導者 吉永龍陽先生
場所 鷺宮地域センター
練習日 金曜日(一九時〜二一時)月4回
生徒数 一二名(男性六名・女性六名)

若鷺教場からこんにちは



発足当時は龍洲先生、龍陽先生お二人の指導を受けておりましたが、一年後に船橋教場が開設され、龍洲先生は船橋教場に指導に赴き現在に至っております。年に数回は龍洲先生の指導も受けております。当教場でも人の出入りがあり、新しい人の入会は大歓迎です。

まだ記憶に新しい事ですが、当教場創設十周年に当たる平成四年度温習会では、西本秀龍構成による「戦国の武将」を若鷺教場が一丸となつて吟じることが出来大成功に終わりました。先生はじめ皆様に感謝しております。又、月一回は自分で選んだ吟に取り組んでいます。以前に習った吟を、新しい吟を、と、良い方向に進むものと思っております。

たまには年に数回は練習が終わって先生を囲みビールを飲みながらカラオケを歌い親睦を深めております。七月の最終金曜日には練習を早く切り上げ、前期納めの酒吟会を、十二月には一年間の反省をこめての納会等詩吟以外でも楽しんでおります。是非見学においで下さい。歓迎します。

次号は、船橋教場へバトンタッチ どうぞよろしく

奥伝の免許を戴いて

八王子会 平田成城

昨年は私にとつて、いろいろな出来事が多発した年であつた。その中でも最大のアクシデントは、屋根から降りる際に、立て掛けた梯子が後向きに倒れ、垣根を飛び越えてアスファルトの路上に転落したことである。幸い命に支障はなかつたが、背骨を骨折し頭部の打撲もあつて、救急車のお世話になるという予期せぬことが起こり、その後遺症に長時間悩まされた。

入会の動機

生来、私は音楽がことのほか不得意で、その発声に最も高度な能力を要するといわれている「詩吟」とは、全く無縁の存在であつた。たまたま六年前に八王子詩吟同好会が発足した際、橋本さんから入会の勧誘を受けたのがそもそもの始まりである。それも過去の職場が先生と職務上親しかつたという理由で、何となしに入会した私は、スタートの時点で既に他の同僚の方々は大きなハンディがついていていたと思う。その為そのハンディを少しでも取り戻そうと努めたので、時には喉から血が滲むことさえあつた。やつてもやつても成果が上がらず、また年令的にも歳を取りすぎていたので、「嗚呼、やつぱり俺は駄目かな？」と思うことが度々あつた。

石の上にも六年

昔から「石の上にも三年」という諺があるが、入会後既にその二倍の歳月が流れた。あまりうまくは出来ないが、なんとか油がかりなりにも人並みに吟じることが出来る迄になり、何だか夢のようなのである。これも一重に会長はじめ、諸先生方のご指導のおかげであると深く感謝している昨今である。

昇段の喜びと反省

段位が上がるということは、誰しも嬉しいことである。だが待てよ。段位にふさわしい実力が伴わなければ、却つてそれが負担になる。それを思うと昇段したからといって、有頂天になつて喜んでゐるわけにはいかない。「階級が上がると権限が増す反面、責任もまた大きくなつてその力量が問われる」ということを自衛隊での勤務では随分言われたものである。勿論「詩吟」の昇段と同一視することは出来ないが、何等かの共通点があるように思われる。更にその免許が「準師範」「師範」等の免許ともなれば尚更のことである。

段位が飾りものならぬための努力

昨年の納吟会に吉永会長が免許を各人に渡された後、「奥伝になつた皆さんは、今日から先生である」と話された時には、なんだか六の中にも入りたいような気持ちになつた。又会報十二号の会長の挨拶に「総本部でいう師範位(準師範以上)は単なる飾り物であつてはならない」ということを言われている。これ等の御教訓をふまえ、その段位にふさわしい実力をつけるため、常に興味をもつて更に自主積極的な努力をしなければならぬと決意を新たにされた次第である。

「吉野懐古」の思い出



顧問 岩坪博祥

私は若い頃から詩吟が大好きで、木村岳風先生のレコードを買ひ集めて勉強したりしてゐたが、余り自信がなしてゐたものである。昭和五十年頃、湯河原温泉で小学校時代の同窓会が催されたことがあつた。宴たけなわとなり余興が出始めたので、私は早速、藤井竹外の「吉野懐古」を吟じた。私が非常に親しくしてゐた友達が引き続いて私と同じ詩を吟じたのであるが、実に素晴らしい吟であり、私は酔いもさめて正に穴があれば隠れたいような恥ずかしさを覚

えた。相撲で言えば序の口と幕内の此のように大きな技量の差というものを、まざまざと痛感させられたのである。

昭和五十四年に広島幼年学校の総会で、吉永会長の正に胸のすくような名吟を始めて聞き、心から魅せられて七十三才という高年で南洲吟道会に入門したのであるが過去のその友人との思い出が、いつも私の心中を支配してゐたことは確かである。

初級の始めての昇段試験は「吉野懐古」を吟題として受けた。事前に会長から懇切周到な指導を頂いたことが今も忘れられない。「眉雪の老僧」という「ピ」の吟じ出しを軽く始めるようにと繰り返し指導されたことなどが心に残っている。

昭和六十年頃その友人と再会した時、始めて吟の勉強をしてゐることを話し「吉野懐古」を吟じたのであるがその友人が「うまくなつたなア」と驚いて言つた言葉が今もはつきりと頭に残つてゐる。

上杉謙信は一遺恨十年一剣を磨く流星光底長蛇を逸す」と詠じられたが、私は遺恨ではなく又十年でもなかつた。一・二年の勉強だったが、正に長蛇を捕獲したかのような思いだつた。序の口力士が幕内に入幕して肩を並べたような嬉しさで一杯になつたことが昨日のことのように懐かしく思い出されて来る。

「追いつけ、追い越せ」というのは、五力年計画を次々と重ねて国力の充実に努めたソ連が、当初アメリカを対象としての標語であつたが、私はこの友人の吟に追いつくと言ふことを一つの大きな目標として、吟の勉強に精進したことは確かである。今は既に追い越して、同じ幕内でも番付では教壇上に記されているかのような確信さえ抱いてゐる次第である。

私は大正十二年、十三才で広島幼年学校へ入学したのであるが、一年生の國漢文は頼山陽の孫である頼弥次郎という教官から教えられた。既に六十才位の老齢になつて居られたが歴史教科書にのつていた頼山陽の肖像面によく似た重厚な面影を残して居られた。吉野に関する詩三題を教えられたが、私は詩句語調共にこの「藤井竹外」の詩が最も好きで若い時から折に臨んでよく吟じて居たものであるが、いつも当時の頼教官の面影が彷彿として眼に浮かんで来るのである。

同志増加の一途 新入会員紹介

前号でお知らせした後、新たに次の方々が入会されました。どうぞよろしく願ひします。

- 湊山牙子 (龍暘会) 練馬区南大泉四ノ五二ノ七 ☎〇三(三九二一)三三八二
- 矢吹二郎 (三菱) 杉並区阿佐ヶ谷北二ノ一九ノ七 ☎〇三(三二二三)八七八五
- 日高康祥 (三菱) 横浜市保土ヶ谷区峰岡町二ノ一四六ノ二 ☎〇四五(三三五)六三八九
- 石井英代 (大泉) 練馬区土支田二ノ四〇ノ一八ノ二〇七 ☎〇三(五三八七)九五九三
- 横山治安 (八王子会) 八王子市泉町一五〇ノ三 ☎〇四二六(二四)二〇五二
- 棚木ケイコ (龍暘会) 会津若松市意合町四ノ八 ☎〇二四二(二四)七四六一
- 高山玲奈 (高山) 板橋区高島平三ノ一ノ一〇六 ☎〇三(五三八三)〇三〇九

尺八の出前伴奏をお引受けします

初心者から高段者まで、大会に備え尺八伴奏で詩吟の練習を日頃より練習してみませんか。

連絡先 世田谷区喜多見五ノ五ノ二十二 ☎〇三(三三三〇)三八八〇 佐藤勝祥

作者点描

池尻教場 大淵龍生

徳川光圀

第二代の水戸藩主、家康の第十一子頼房の三男（一六二八〜一七〇一）幼名千代松（大日本史）朱子学を学び大義名分論に基づいて国史の編纂に着手、学者を集めて水戸学の一学派を作り徳川將軍家の血族でありながら尊王論を唱え湊川に楠公の墓碑を建てたりした。晩年は領内の西山に隠居して梅里と号し又西山公とも云われた。字は子竜、水戸黄門として庶民に人気が高く映画や講談化しているが諸國漫遊の事実に於いては真偽定かではない。（註）湊川は神戸市の中央を流れている川で六甲山に源を発し、全長約四軒である。その下流一帯で湊川の合戦が行なわれた。神戸駅前には鎮座する湊川神社は楠公父子以下一族の將士をまつり、その境内に楠公の墓碑がある。

頼山陽

江戸時代後期の儒者、史家（一七八一〜一八三二）広島藩の儒者の子として生まれ名は襄（のぼる）、幼い頃から文才が豊かで詩文に秀でて十八才の時に江戸に遊学の途中、湊川で楠公戦没の跡を弔って長編の古詩を作った名をなした。二十一才で京阪間に出奔して、引き戻された邸内に閉じこめられたが、二十四才で許された時には、修史の隆世の著述はすでに開かれていた。文化四年（一八〇七）には、日本外交史の橋本も成り、その後これに加筆して文政九年（一八二六）に完成、文政十年（一八一八）に中松平定信の望みによってこれを献上した。経済論には「通議」があり史論「日本政記」と共に三部作をなしている。（註）日本外交史は源平二代から徳川氏に至る武家の興亡を各家別に記し、それに史論を加えた漢文の史書で全十二巻から成っている。

銀杏並木

八王子会 中島濃洲

八王子市内の甲州街道両側には、多摩御陵入口を中心にして約四軒にわたって見事に育った銀杏の街路樹が立ち並んでいる。この銀杏並木は毎週詩吟教室へ通う道筋に当たり、私達の目を楽しませてくれる。通い始めたころは関心がなかったが、教室で吟じる詩の心にふれたり、又最近習い始めた俳句の影響もあってか、日常生活の一端に詩心を覚えるようになってきた。銀杏並木を一年を通じて観察して見ると、春は威勢の良い若芽で気を養い、夏は青葉で覆った木陰で暑さを和らげ、秋は紅葉して人の心をなごませ、銀杏が実り、冬には落葉が人の心を明るくする。銀杏並木がこんなにも沢山の人の生活に役立っていることに感謝しながら、今では詩吟教室へ通う楽しみの一つになっている。

銀杏を 拾う老婆の うしろ姿
赤信号 並ぶ車に 落葉舞う
銀杏並木 四季折々に ありがたし

羽織と袴

池尻教場 大淵龍生

明治時代から男子の正装とされ紋付のものを着ていた。江戸時代には、士分に限られていた。明治に入ってから一般に用いられるようになった。又、明治十年（一八七七）にはフロックが官吏の礼装と定められ、下級者には羽織袴を代用することが許されたので一般にはこれが広まり、現在では和服の礼装となつてゐる。生地は羽織は羽二重、縮緬など絹地で袴は仙台平が用いられる。（註）仙台平は精巧な絹袴地の一つで貞享の頃（一六八四〜一六八八）に西陣の織工八右衛門なる者が、仙台侯伊達政宗の命で仙台で製し始めたものと言ふ。フロックとは男子が昼間着る洋式の礼装で黒いラッシュヤ製、上着はダブルで跨まであり袖は真直に切りズボンに縦じまをはく。

詩歌投稿

◆謁伊勢神宮

八王子会 脇 成吟

北白川宮房子祭主御歌

まごころを ただひとすじに あらはして
うづの宝を 神に捧げし

（注）うづの宝―最尊至上の宝

仰ぎ瞻る宗廟 古風尤なり

感激言無く 涙自ら流る

列聖相承け 祭祀を厳にす

神州の正気 是れ千秋

仰瞻宗廟古風尤 感激無言涙自流
列聖相承嚴祭祀 神州正気是千秋
（下平声十一尤韻）

◆初孫

中町会 伊集院陽洲

母をおつて 泣きさけびたる みどり子の
知恵のつきゆく たしかさを知る

眼を細め まぶしげな顔 父に似て
あどけなき子のいまめざあたり

小さき手 しゅんしゅんたたき 往く年も
また来る年も めでたかりけり

孫二人 両腕に抱き 我が夫は
眉八の字の 好好爺なり

いだきたる あどけなき子の ぬくもりは
老いゆく我の よすがとならん

◆新春折々

八王子会 若林謙吟

「晴れてよし 曇りてもよし 富士の山」
初独吟に 遠富士見えす

初詣で 高尾登山に 挑みけり
休み休みて 老ふたり杖

展望台に カールブッセの 歌碑ありて
山の彼方の 空みて吟ず（身延山頂）

クラス会の 前座つとめて 吾が唱ふ
ワイン片手に 牧水のうた

「白江野」の 吾の歌集に 節つけて
友の吟詠 胸熱く聞く

◆俳句

中町会 小泉宗洲

風光る 風鐸の音 ひびきあい

万緑の 微動だにせぬ 刻のあり

泣き笑う 羅漢抱きて 山芽吹く

佗しかり 北風に赤き 痰を吐く
八王子会 先崎博洲

長き夜を 点滴が刻む 更けにけり

百八十日 病棟の 日向ぼこ

栗一穂 大きく揺れて 陽の終わる

